

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十三）

久保田 啓 一

凡 例

- 一 漢字は、常用漢字に含まれるものはそれを用い、他は正字体とした。ただし、「并」のように、組版の都合を考慮して俗字を使用した場合がある。また、明らかな誤字は訂正した。
- 一 平仮名・片仮名については、書き分けに意味があると考えられるため、底本の表記に従うのを原則とした。平仮名の文脈中にあられる「ニ」「ハ」「ミ」もそのままとした。なお、合字の「ヤノ」などは、それぞれ「コト」「シテ」などに開いた。
- 一 適宜句読点・濁点・半濁点・中黒を補った。
- 一 漢文の訓点は、明らかな誤りを正した以外は底本のままとし、新たに補うことはしなかった。
- 一 踊り字は、ゝを「々」とした他は底本通りとした。
- 一 校訂者による注記は、〈表紙〉のように（ ）で示し、底本に使用される（ ）とは区別した。
- 一 欄外や行間の補記、割注の類は、〈欄外〉（○○○○）・〈傍注〉（○○○）・〈割注〉（○○○○）のように「」で括り、底本に使用される「」とは区別した。
- 一 底本の行移りには従わず、内容に応じて適宜改行した。また、改頁を示すことはしなかった。
- 一 闕字・台頭・平出の類は無視した。
- 一 日付・天候の記述から本文に移る形式は冊によって異なり、統一がとられていないが、日付・天候を一字下げで書き始め、本文を続

ける形式に統一した。

- 一 通読と検索の便を考え、各冊の最初と最後には〈第〇冊 表紙〉（以上 第〇冊）と校訂者注記を掲げ、各月の初めには〈文政九年〉のように該当年を注記した。

- 一 全冊の本文掲載終了後、索引を付す予定である。

〈承前〉

〈扉〉

付紙

十二〈割書〉〔自嘉永六年四月廿四日、至同年八月十二日〕江戸在勤

従駕日記 二

〈本文〉

四月〈嘉永六年〉

廿四日。晴。

非番二付、瀬能吉次郎同伴、横山町一丁目京崎ヤ亦兵衛ヲ訪フ。聞人なり。それより和泉屋、日本橋須原ヤ、神明前岡田ヤ等之書肆をたづね、岡部〈傍記〉〔田カ〕東平が浜松丁三丁目之僑居ヲ訪てかへる。

廿五日。晴。

左京様御暇乞として御出候付、謙蔵詰かゝりより相勤め、予午時前

二出仕、未半時比ニ事畢て固屋ニかへる。

金二朱と三百文 ミの七へわたす。台所賄物之代也。

廿六日。晴。

非番也。

入老歩式朱 百藏より。

廿七日。曇。

当番也。早朝出仕。朝御膳勤之。其後御対客并ニ御寺参トシテ御出。

今夜明詰ニ懸りより朝御膳差上候事。

廿八日。晴。

非番也。今日三井善右エ門・有福弥七・村田次郎三郎誘引ニテ外出ヲス。三井・有福ハ公儀人、村田ハ物頭故、三人共御門限氣遣なきもの也。予一人非番切手ニテ罷出ルトキハ黄昏ニ及テ難洪ニ付、御奥筆者口〔字形不明〕〔傍記〕〔部カ〕ヤヘ対シ記六所へ申テ御用切手ニシテ出タリ。山下御門外之河岸より乗船ニテ浅草ニ詣テ今戸ノ大七ニテ酒宴、申ノ下刻より、マタ墨田川ヲ下り、船ヨリ揚リテ三十間堀ノ佐倉ヤヘ立寄、茶ヲ喫シテ戌ノ刻バカリニ御屋敷ニカヘル。

廿九日。曇。

今日当番。予遲出之筈之處、御馬場并ニ御物見御出ニ付、新廊下詰、昼御膳詰間ニ合兼候ニ付、巳時前より出仕、御膳之方勤之。其後昼仕廻下り、七ツ時分より又々出勤、宵詰。

入金一両老歩錢四拾文 初番手借。

入同老兩老歩錢七百八拾九文。

晦日。曇。

非番也。岡部藏人来ル。名を東平トイフ。執中抄二冊ヲカス。

五月〔嘉永六年〕一日。晴。

今朝御登城也。仍之新庄七兵衛詰かゝりより朝御膳を勤之。予卯中刻出仕。其後御登城。今夜予明詰也。

二日。雨。

非番也。

金一步 当月賄料トシテミの七へワタす。

三日。晴。

今朝当番。午時前より出仕。殿中無事。夕御膳御夜食共ニ勤候。

金二歩式朱 絹ぶつさき羽織之代云々。

〃式朱 大玉より預り銀残り小七郎へ渡ス。

入五百三拾四文。

今夜宵詰也。番頭佐伯、御小納戸上山庄兵衛也。

四日。曇、小雨。

昌平橋外酒井若狭守様邸ニ伴金〔傍記〕〔圭カ〕左エ門ヲ訪フ。かへさに浮田一蕙が僑居を小川町ニとへどもたしかならず、空しく帰りぬ。今夕三井善右エ門固屋ニテ論語講尺をはじむ。昨夜八木甚兵衛着府。〔頭欄〕〔〇〕

五日。晴。

当番也。朝御膳、明詰より勤仕すべきの處、謙蔵夜の内より出勤、人を遣ハしたるニ仍て、予もやがて出仕、則御膳をつとむ。其後御登城、御帰りがけ御ちまき・御銚子・菖蒲等被召上候事。但昼御膳謙蔵勤之〔割書〕〔御夜食同断、今夜明詰也〕。

六日。曇。

非番也。

七日。晴。

当番也。九ツ時前より出勤。夕御膳并ニ御三度勤之。今夜宵詰也。

八日。晴。

非番也。

九日。晴。

当番也。早朝出勤。朝御膳勤之。今夜明詰也。下谷之方出火、暁天ニしめる。

十日。雨。

非番也。今日殿様御前様麻布御屋敷御出。夜深く御帰之由。

十一日。曇。

当番也。九ツ時前より出仕。御夕御膳御三度勤之。宵詰也。松本彦右工衛門帰国之便ニ金二朱、京師御席代（傍記）〔当銀力〕とシテ引田辰之允へ送る。実ハ七百文之处へ二朱差越候事。尚又岡田三郎（割書）〔冷泉為恭〕へ応永仏一軀を贈る。志道主水も今日出立之由也。

出金式朱 京師へ送る。

十二日。曇、晴。

朝之間曇りて後ニ晴たり。午時前より村田次郎三郎・瀬能吉次郎同伴にて堀切之菖蒲見ニ罷越候事。あやめハマことに夥敷けれども、俗氣甚しくてももしろからず。帰後有福氏にてすしの馳走にあへり。

十三日。雨。

夜前棕梨藤太・周布政之助より書状到来、御用之義有之ニ付、明朝五ツ時罷出べきよし也。仍之今朝御殿罷出候处、鞞負殿申渡しにて、御用之間相に御裏ニ於て講読被聞召候間罷出可申との事也。

仍之、御用所其外御裏老御取次に御礼廻り今日当番之处、右ニ付諸方駈廻り候事。

十四日。晴。

非番也。

十五日。晴。

今朝六ツ半時御供揃にて御登城ニ付、朝御膳前夜詰かゝりより供奉之。予六ツ半時出勤、御帰殿之上下ル。

十六日。朝雨、夕晴。

非番也。

十七日。曇。

当番遅出也。九ツ時前より出仕。御物見御下りニ付、新廊下詰仕候事。今夜宵詰也。

十八日。雨。

非番候。

十九日。雨。

当番朝出也。朝御膳勤之。今夜明詰。

廿日。朝雨。

非番也。早天ニ御用切手を以宇喜多一蕙僑居ニ罷越候。午時帰邸。未ノ下刻より御裏被召出、小学并ニ花月草紙講談被仰付。今日御精進ニ付御酒不被下、御菓子茶御懸合頂戴。

廿一日。晴。

当番也。已下刻出仕。御二度御三度勤仕之。今夜宵詰也。

廿二日。晴。

〔頭欄〕〔○〕非番也。今日浮田一蕙同伴にて三井・有福・村田と共に四谷の春秋亭ニ行ク。芸妓両三人来ル。歎を尽してかへる。席上にて歌画等の遊びあり。

廿三日。曇。

当番也。早天出仕。朝御膳相勤之。

廿四日。晴。

〔頭欄〕〔○〕非番也。駿河台ノ安積祐助ヲ訪フ。留守。ソレヨリ番丁ノ方ニメグリ、埒次郎ヲトフ。御厩谷ト云处也。□（字形不明。血か皿に似る）附五枚箱入ニシテ土産トス。今日盃後御裏ニテ小学ト花月草紙ヲ講ズ。老女挨拶ニテ御吸物御酒頂戴。御包之物被下候。其後御取次ノ詰处ニテ御膳頂戴。

廿五日。晴。

当番也。今日御前講（割書）〔中村伊介〕ニ付兩人共ニ出勤可然由之处、予少々遅出、仍之御講尺之間ニ不合、謙蔵一人勤之。御二度御三度予勤仕之。

廿六日。晴。

非番也。今日日本庄割下水ノ辺ニ、那須与市殿と云交代寄合ニテ千石取之旗本アリ。学者之上ニ茶人ナリ。コレヨリ招請、午時マカリタリケルニ、茶室四疊半、天窓付ニシテイトウルハシ。待合其外庭面もイトヨク調ヘリ。相客ハ浮田一蕙及ビ浅草之鳥越ナル白川殿役所ニ在住ノ古川将作ト云者也。会席附等ハ別ニ有之。仍之略之。今日浮田一蕙

浅草黒船丁ノ河岸ニ転宅ナリ。那須主マコトニヨキ人物ニテ梅松訴陳ト云著書モアリ。三冊オノレニクレラレタリ。今日ノ土産トシテ秘蔵ノ萩焼ノ茶碗ヲツカハス。マコトヤ、毎月八ノ日ニ那須家ニ於テ会コレアルヨシナリ。今ノ与市殿ハ廿万石ノ佐竹殿ノ子ナリ。

今日御用所ニ於テ、近藤晋一郎

右御用之間合ニテ於有備館文学取立被仰付候事。

マタ井原豊前ヨリ手紙ニテ、

御自分事御小納戸御用懸被仰付候条可被得其意候。以上。

五月廿五日

日イリマヘニ帰リタレバ、夜ニイリテソコ、御礼マハリヲスマス。

廿七日。晴。

当番朝出也。今日御前講ニ付十四畳御伺公。了後御物見へ被為成タルニヨリテ、マタ新廊下口ニ詰タリ。今夜明詰也。

廿八日。晴。

非番。

廿九日。晴。

当番遅出也。別事なし。余宵詰、有福の会ヲ済して後出ツ。

六月（嘉永六年）一日。晴。

非番也。御登城、午時前ニ御帰館。今日御国飛脚来ル。去年十五日日附ノ松岡良哉書状ヲ看ル。養子垣之介事、十四日ニ如御願被仰出タリトゾ。小島堀切より鉄出るニ付、金ノ筋力銀ノ筋力、掛リノ役人布施ヲ始メ大悦ビニテ金堀ニ申付、底マデ堀ツクルトナリ。

周布留槌ガ食料先月分今月分一所ニシテ金一步、ミの七ヘワタス。

二日。晴。

当番朝出也。昨日ノ飛脚便ニ松岡良哉より書状到来、先月十五日ニ養子垣之介義被仰出有之候由也。仍之今日御番之間合ニ鞞負殿を始御手廻頭并ニ手元其外御礼廻り致し候事。

銀三百文払　めりやす腕貫代。

三日。晴。

〔頭櫓〕〔〇〕非番也。今日無事。但異船四艘浦賀ニ着ノヨシ、御注進コレアリト也。

四日。晴。

当番遅出也。昨今暑氣如蒸。京都永原ヤ善兵衛より唐木綿染地御紋上下を送り下ス。代三步式朱ト九匁五分也。今夜宵詰ノ事。

五日。晴。

非番也。異船事ニテ諸役所念劇。

六日。晴。

当番朝出也。異船事ニてもし出張被仰付候時ハ御用意なくてハ叶ハざる由にて、今朝午時馬場殿に成せられ、備立御覧。今夜明詰。

七日。晴。

非番也。諸大名追々海辺出張、御在府之御並方へも御内意ありて出張之用意とり、先手足軽物頭村田二郎三郎、同勢引率し暁天出陣、御弓物頭代中村伊勢之允御同断、兼帯御使番道家竜介、大番児玉作兵衛・山田七兵衛・渋谷長兵衛・堀甲之進・福原三蔵・進藤直之允・内藤彦作・三戸与五郎（マ）。

八日。晴。

当番遅出也。有福弥七入用金不足ニテ出陣むつかしき由ニ付、余御小納戸ニテ拝借金小林手形ノ内十兩用立候。尤弥七よりハ二十兩ノ手形を出し候へども、十兩相納候ニ付、十兩渡候段、裏書ニシテ同苗舎人へ今日相渡候事。

九日。晴。

〔頭櫓〕〔〇〕非番也。浦賀表より吉田大次郎帰り来りて、異船より昨日願書を相渡候事を語る。凡三百人計、劍付鉄炮を以て備を正し、陸地ニ上り、願書を差出し候由也。是ニ因てまづ双方一和の躰也。願書当方ニ於てハ御取不被成、願筋有之バ長崎へ廻るべき由、始を張つよく被仰候へども、つひに公義にえ否ミ給はず、こゝにて取給へり。まことに將軍家の威光も衰へたる世の末とおもハる。彦根人数の備さ

らに調はず、たゞ会津の舟備のミ整々として正しき由也。御家の御評判ハ甚よし。上下共に具足を風呂敷包ニして背負ひ出たるけしき、いとゆゝしかりしとなり。大森と云所御請場にて彼処ニ陣処を構へ、一二三の三備昼夜相守り、海上にハ番船四艘を浮べ、近辺人乗入たる時ハすぐに公儀へ注進の為也。尤細川侯の同勢金沢に屯して沖合ニ番船を懸居るなり。仍之彼方の船より知らせ次第御注進の手筈なり。日々麻布の御蔵より武器を運び、多人数の日雇をかゝへずハといはゞ御出陣もあるべきてい也。

金二朱 ミの七へわたす。

十日。晴。

当番朝出也。夜ハ明詰ニて宿しゐたるに、丑の時ばかり俄にさわぎ出て、御用所も立ぬ、何事に歟と聞に、異船はね田辺の沖まで入たるを御注進なきよし、留守の三井善右エ門を召出されて御たづねなり。善右エ門より、数人之者を海上ニ付置候ニ付、見遁すことあるまじく候、その上細川の舟よりもおとせせず、不審の義なるよしを申て、此御方の落度とハせず帰りたれども、俄かに桂小五郎及御小性の内より一人早馬にて大森御請場まで懸合、能々聞正し見るべきとの事にて立出たり。

十一日。晴。

非番也。御裏の女中わか子といふハ歌よミ也。此者より宮木茶伯を以て手紙一帖・書簡袋二十枚おくりたり。

十二日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕暁ニ雨降ル。是に依て涼気大ニ生ぜり。黄昏ニまた小雨。今日当番遅出也。今朝五ツ時比、異船浦賀表揚帆のよし也。

十三日。晴。

朝小雨。今日非番也。

十四日。晴。

当番朝出也。今日大森表出張の同勢凱陣、旗差物をたてゝ帰ル。金鼓の音をさせぬのミ也。洞春公御正忌日ニ当りて目出度凱陣の段重畳

也。御国へ飛脚立ニ付布施と村田とへ委細を申遣ハス。今夜明詰也。

十五日。晴。

昨日御城より今日御登城可為在由の御召あり。全躰ハ此十五日ハ無之事なれども、早天に御登城アリ。御輿にて御茶菓子を出され、今度の一件人数早速差出候。家来共苦勞を遂候段、御祝着ニ被思召由の御言なりとぞ。細川侯此御方柳川侯也。其他ハ御家門御親類ニ付別席ナリトゾ。且此度の造作入ニ對せられ、先達而仰付られし御手伝御免レ仰付たりと也。予ハ非番ニ付早天より外出、浮田一蕙を訪フ。御小納戸の画料三兩を遣ハす。其後横山町一丁目宮崎又兵衛ヲ訪フ。又兵衛話ニ、金座の後藤三右エ門ハもと大江姓ニテ長井氏ナリ。美濃の加納の城主長井式部少輔の三男小輔三郎といふ。加納ニテハ八万石余の大名なりしに、没落の後東照公より金坐を被仰付、後藤と改む。然るに近年水野様一件之時、金坐被召放てもとの長井ニ復姓、家号を大江ヤとせしを、又兵衛諫めて止めたりとぞ。又兵衛ハ名を後継といふ。歌も少しハよむ也。彼者の方初昇ニ、

ながき根のたえぬためしにあやめ草千とせのさつき今もひかなんと詠て遣したりといへり。

十六日。晴。

当番遅出也。御二度御三度勤之。其後宵詰。

十七日。晴。

非番。無事也。今日虎十郎と外出、下人ミの七と外出、至而寂寞也。

百文 風呂銭とシテ払之。

十八日。晴。

当番朝出也。御朝御膳勤之。今夜明詰。證人深野新兵衛より聞之、御門無切手勘過之御沙汰相成しとぞ。

十九日。晴。〔頭欄〕〔〇〕

非番。村田次郎同伴にて一蕙が寓居を訪ふ。それより橋場なる川口といふ茶店へまかり、しばらくありて有福弥七来ル。終日遊宴。白木手代兩人、舞妓其外を率て来る。桜やよりも芸妓を率て来ル。弦歌如

涌、杯盤狼藉也。予黄昏近き比帰れり。

廿日。晴。

当番遅出也。無事。宵詰也。

廿一日。晴。

非番。無事。

廿二日。晴。

当番朝出也。今日御出ありて御老中方をめぐらせ給へり。明詰也。

廿三日。晴。

非番。永田馬場ナル村田嘉門ガ許ヲ訪フ。三十年前ヨリノ知音ユエニ大キニ懐旧ノ情起リテ、種々ノ事共モノ語フ。此亭ニテ中食ヲシテ麻布御屋形ニ至ル。杉田又ノ助ガ固屋ニテ一会、湯浅速水・佐々木省庵等来会。探題。薄暮ニ桜田ニカヘル。今夜福原ニ行テ長談。

廿四日。晴。

当番遅出也。御二度勤之。御三度御台廻シナリ。

金式朱 ミの七へ遣す。当月分台所料、先日之二朱ニアハセテス

ム。

廿五日。晴。

非番。無事也。

廿六日。晴。

当番朝出也。御朝餉勤之。今夜明詰也。

廿七日。晴。

明番。今日また麻布御館ニマカル。佐々木省庵ガ亭ニテ一会。

廿八日。晴。

当番遅出也。御二度御三度勤之。宵詰。

廿九日。晴。

非番。終日内居。

晦日。晴。

御被なり。当番朝出。明詰也。今日渡辺伊兵衛唐船方より到着。

七月（嘉永六年）朔日。晴。

非番。今日駿尉様より異船事御見舞トシテ長井隼太到着、并ニ御前警衛之人数トシテ横井・内藤之師家を始め十四人之強力武勇之士到着。

二日。晴。

当番遅出。宵詰也。今夜物頭兩人着。

三日。晴。

非番。無事。

金式朱 内藤直太郎へかす。

四日。晴。

当番朝出。明詰也。無事。

五日。晴。

非番。料理早指南一冊、遠西名物考補遺三冊（割書）（七匁五分、四匁）、須原ヤより取之、松岡良哉ニ遣ス。尤明日渡辺伊兵衛出立之便を以也。尚又一昨日麻布之丸権といふ紺屋より木綿御納戸色揚一反、越前布上下地形付一反持参。色揚ハ恰なる所、裏を彼方ニ留め置たるニ依而近日持参之筈也。その序ニちりめん形付ひとへ羽織一、ひとへ物一、かたびら一、ちゞミひとへもの一、以上四枚遣し候事。

六日。晴。

当番遅出也。今夕番頭小沢二右エ門并ニ御小性中異船事御見舞トシテ着宿。御二度御三度相勤候事。黄昏一蕙来ル。十二月の画持参。今夜宵詰。

七日。晴。

齒痛ニ付、朝之伺諸方へ廻礼をせず。上にも御登城無之ニ付、御目見もなし。至極閑暇也。一蕙十二月の内時雨（小書）（十月）ヲ飯田永伝、朱皮袋を二階養安ニツカハス。また国府烟草一包今津清（ハシ）カス。

八日。晴。

当番早出也。朝御膳勤之。無事。明ツメ也。

九日。晴。

今朝非番ニ付、芝浜松丁二丁目岡部（傍記）（田カ）東平方へマカ

ル。箭祭餅ヲ出セリ。午時帰ル。

十日。晴。

当番遅出也。夕御膳御三度勤之。無事。宵詰。

十一日。雨。

非番ニテ固屋ニ閑居ノ所、四ツ時比より雨フリ出タリ。五月廿一日ヨリ今日ニ至リ四十八九日ノ間旱天ニテ暑氣強ク、人々困ジ果タルニ、今日ニ至テカクヨキ雨ノフリ出タル、マコトニ玉ヲ降スニコトナラズ。今日仕立物師北沢ヨリ上下二具ヲ持来ル。

十二日。時々雨。

当番朝出也。今夜明詰。

十三日。晴。

非番。

老歩ト五百二十文 ミの七かや代トシテ払ひ遣ス云々。

十四日。小雨、晴。

当番おそ出也。無事。御二度御三度勤之。宵詰。

金式朱 ミの七へ遣す。

十五日。晴。

非番。夜小雨。

十六日。晴。

当番朝出也。明ゾメ也。

十七日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番ニ付外出、まづ下谷の仲田頭忠〔割書〕〔字ハ藤右エ門、幡随院のほとりニスム〕を訪ひ、半紙十帖をツカハス。扱浮田一蕙が僑居ニマカル。カヘサニ宮崎亦兵衛亭ニテシバラク物語リシテ、薬研堀梅花齋ガ許ヲ尋テカヘリス。

金式朱 ミの七云々。

十八日。晴。

当番晚出也。御二度御三度勤之。今夜宵詰ノ事。横山町宮崎亦兵衛へ執中抄二冊カス。歌談三冊遣之。異舟事ニテ御見舞ニ参リシ御小性

中番頭小沢七兵衛ヲ始メ明朝出立帰国ニ付、暇乞トシテマカル。

十九日。晴。

非番。ちゞミひとへもの地、ちりめん羽織、二つ北沢ニワタス。晚頭伴金右エ門ヲ訪フ。

廿日。晴。

当番朝出也。今夜明詰。ことなる事なし。

廿一日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番也。朝のほど北沢より、ちゞミひとへもの、絹紋付ひとへもの、唐木綿の羽織三品仕立とゞのへりとて来てたり。朝餉をハリテ薬研堀高久隆古〔割書〕〔号梅花齋〕ヲ訪フ。一蕙ガ門人也。時バカリアリテ、吉田盛方院法印トテ公役ノ御医師アリ、ソノ親父先々大将軍家ニ仕ヘラレタルガ、薨去ノ後故アリテ入道セラレタリ、今ハ小梅ニ居ルヨシ也、隆古方ニ来ラレテ、何クレトモノカタラヒツ。ソレヨリ野々口隆正ガ僑居、村松町裏通ニ福田宗玄トテ□〔字形不明〕家ヲ尋ヌ。隆正ハ留守也。亭主ニ逢テ何クレトモノカタラフ。午時過ニ帰畢。

廿二日。晴。

当番晚出ニテ御二度御三度勤之。夜ニ入テ將軍様今日巳ノ時御薨去之段申来リ、御停止トナル。実ハ先月廿二日薨去ノヨシ。

廿三日。晴、暑甚シ。

非番。

廿四日。晴。

当番朝出。今夜明詰。

廿五日。晴、夕小雨。

非番。無事。

廿六日。晴、夕小雨。

当番晚出。御夕御膳御三度勤之。今夜宵詰也。今日能登殿着。筆者安間半蔵陪從シテ着。

廿七日。晴。

非番。無事。

廿八日。晴。

当番朝出。朝御膳勤候。今夜明詰。

廿九日。晴。

非番。

八月（嘉永六年）一日。晴。

当番晚出。御忌中二付、平服夕御膳御三度勤之。今日より美味調進

候。今夜宵詰。

二日。晴。

非番。

三日。晴。

当番朝出。朝御膳勤之。夕方より御長屋窓蓋掩之、座敷暗夜の如し。

明日前征夷大將軍左大臣従一位家慶公を増上寺ニ葬送し奉る。仍之今

夜明詰。

四日。晴、風。

非番。今日御葬送ニ付而、西長屋外御固メとシテ小笠原左京大夫様

承之、御同勢此御方明固屋をかりて休息、此御方よりハ北南之御長屋

外を御人数を以て固められ候事。

五日。晴。

今日より自用にて御門勘過被差免候事。今日当番晚出。宵詰。

六日。晴。

非番。長崎へオロシヤ船四艘来着、交易願ひ申出候由、先日飛脚到

来。但此度ハ至テ穩カナリトゾ。

七日。晴、夕小雨。

当番朝出。明詰。無事。

八日。晴。

非番。

金式歩内一步 今月マカナヒ。老歩 ミの七へかしとシテ渡ス。

今朝より少し風気、其上少し下痢の気味これあるに依て、二階養安に薬を貼もらひてのむ。

九日。晴。

当番晚出。青木周弼に見せて薬をのむ。

十日。晴。

非番。療病之外無佗事。

十一日。晴。

当番早出。明詰。

十二日。晴、夜二入テ雨。

非番。

〈扉〉

付紙

十三、〈割書〉（自嘉永六年八月十三日、至七年四月廿二日（安政元年））江戸在勤

参観従駕日記 三

〈本文〉

八月十三日。朝雨、後晴。

当番晚出。宵詰。

十四日。晴。

非番。麻布御館行。湯浅速水方にて長談、蕎麦（そば）をたうぶ。

十五日。晴。

当番朝出。今夜月清し。瀬能言直鮭一重を持来る。十四日夜にくらぶれば雲をりくかゝりて全くの清光ならず。かへりて用人をとこの

意（傍記）「カ」を用る処おもしろし。

十六日。晴、黄昏雨、終夜雪。

非番。未時より村田春野が永田馬場の亭を訪ふ。螺尻といふ処に小倉鈴之進殿の内に、小田切直介といふ画師に逢ふ。また墨田川のはし場にすめる山本英一郎孔融といふ人にもあへり。あとより浮田一蕙も来れり。長談、夜二入て帰る。今夜ふけて三井の円ヤにて粟屋四郎右エ門の振廻美酒佳肴なり。まことや、彼山本孔融がおのれにおくれるうた

鳥の名にミヤこおもひし古しへのあとゝめてとへ岸の松かげ

十七日。晴。

当番晚出。明詰。今日より和兵衛僕とシテ入込。

十八日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番。横山町宮崎又兵衛、また黒船丁浮田一蕙が許をとふ。

十九日。晴。

当番朝出。宵詰。

廿日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番。良斎を訪ふ。駿河台也。金百疋并二唐さらさのふくさ一をおくる。それより御徒士町前田夏蔭を訪ふ。久しく談ぜり。くさく酒肴の馳走二あづかり、これにも唐さらさのふくさ地をつかハす。

廿一日。晴。

当番晚出。明詰。

廿二日。晴。

非番。

廿三日。晴。

当番朝出。今日五ツ半時、御供揃にて御登城被遊候事。今日八ツ半時比、寺西弥二右エ門御目附役にて着、早速麻布へ罷越候事。今夜明詰。

廿四日。晴。

非番。午後寺西弥二右エ門着之悦とシテ麻布へまかる。佐々木省庵

が亭にて暫らくものかたらひ、出て増上寺のわたり通り筋を過て黄昏にかへりぬ。

廿五日。晴。

晚出。御二度御三度供奉之。今夜宵詰。

廿六日。晴。

非番。朝のほどさゞえしりなる小田切直介が許を訪ふ。水野家之画家也。車服の図その外車にかゝられるもの八巻とりかへる。午後駿河台安積祐助良斎を訪ふ。閑談久しくてかへりぬ。

廿七日。晴。

当番朝出也。如何。

廿八日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番。紀藩の岩崎時十郎、アメリカニ流れ行し国人を護送して出府せるよし、一昨日戸川滝雄といふ書生もていひおこせたり。これに依て異国の話も聞まほしく、また時十郎ハ去年長崎へかの漂流人を迎へにまかりし道にて佐賀にて逢し人なれば、なつかしくもありて逢にまかりたるに、このほどハいまだ着せしほどの事故何くれといそがしき由にて、くハしくもえ語らはずかへりぬ。夕がた築地の備前橋に久松五十之助とて歌よみあり。御旗本衆なり。たづねつれどえあはでかへりぬ。

廿九日。晴。

当番晚出。御二度勤仕之。久松五十之助殿より使来れり。明日か明後日かまゐるやうにとの事也。其後御三度勤之。宵詰。

晦日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番。午後築地之備前橋なる久松五十之助殿之亭を訪ふ。茶菓其後酒肴出さる。夜食をも出さる。因州之家中篠田松之允惟成も来る。予に歌之添削を乞ふ。後に神明之神主（い）といふ者来る。くれて後かへる。帰て聞く、今日河野利兵衛を始め無給通之役人など、御役被召上、御国被差帰と也。何事にかわからず。或人云、先達而前將軍家御葬送之節、辻固之時、鐘を為持たる故也とぞ。

九月（嘉永六年）一日。晴。

当番早出。朝御膳勤仕之。其後御登城。今夜明ツメ如例。

二日。曇、時々雨。

非番。河野理兵衛許へ唐さらさふくさひとつ送之。今度之鐘一件ニ

付、御役被召上、御国へかへさるれば也。そのふくさのつゝみ紙に、

さりそへてこれをもちらせ箱根山こえんあしたのぬさの手向に

三日。曇。

今日四ツ時、御供揃ニテ麻布御殿へ被為入。仕立物屋北沢来レルニ

依テ、ちりめん羽織一、アハセ仕立カへ裏ヲソヘテ云々渡之。

今日裏御殿ニテ如例講尺。薄暮麻布より御帰館。余御廊下ニ出ツ。

御三度勤之。今夜宵詰。

四日。晴。

非番也。昼後横山町宮崎太兵衛亭ニマカリテ黄昏ニかへる。

五日。雨。

当番朝出。明詰。

六日。曇。

無事。非番也。

七日。雨。

当番晚出。御二度御三度勤之。宵詰。

八日。晴。

非番。今日小田切直介ヨリ所借ノ巻物八巻返之。

九日。曇。

当番朝出。昼後能登殿固屋へ参る。酒肴を出されたり。来島又兵衛

同席、歎を尽して帰る。今夜明詰。

十日。曇。

無事。非番。

十一日。曇。

晚出也。御二度御三度勤之。宵詰。

十二日。晴。

非番。朝ノ間番丁塙氏を訪ふ。老父三十三回忌ノ由にて多用なれば
とてそこへ出て、小林又兵衛殿を訪ふ。かへさにさぐえ尻の小田
切直介を尋ねてかへれり。

十三日。朝雨、後晴。

当番。朝式御登城也。夜にいらりて今津清吉引受之会也。月明にして

后夜の名をけがさず。今夜明詰也。今日棕梨藤太御役被差替、御国へ

下サル。後役赤川太郎右エ門也。

十四日。晴、朝間少しくもれり。夕方時雨。

朝より出て前田夏蔭が下谷御徒士町の亭をたづぬ。それより須原や

に立より、職原の圭紙をたのみ、築地の久松祐之ぬしの許にゆく。こ

の亭にて麻布の向ふ竜土なる蒲生

人也。主人并に（マ）を同伴にて（マ）といふ人の許にゆく。歌の

会也。薩摩の渋谷三之允国安・田代太郎太清安の二人にあふ。これも

歌よみ也。おのれハさきに出づ。これより浜松町二丁目の岡部がもと

を訪ひ、かへんとする道に、日蔭町にてむら雨のふり出たるを、ある

商家に笠やどりして、日くれんとするほどにかへりぬ。

十五日。晴。

御登城也。おのれハ晚出。御二度御三度勤之。今日ハ宵詰也。

十六日。雨。

終日内居。

十七日。晴。

当番朝出。朝御膳勤之。今夜明詰。

十八日。晴。

中橋（マ）、丁に原甲庵といふ医師あり。もとハ御国ものにて周防の宮

市のもの也。女房ハたか子とて肥後殿に仕へたる女中也。歌を好みり。

今津清吉心易き者にておのれと二階養安を招請せり。夜に入てかへり

ぬ。たか子盆石などをもちてあそぶ女にて、席上にて築てミせたり。

清会なりき。

十九日。晴。

卯ノ半時御登城。新將軍家西丸より御本丸へかへらせ給へる御祝也。御狩衣なり。今日御用所へ被召出、鞆負殿被申渡候へ、

近藤晋一郎

右

八重姫様講談被聞召度被思召候付、御用間合之節、今井谷御裏罷出候様、被仰付候事。

廿日。曇、夕方ヨリ雨、夜中尤甚。

午時過より築地久松之会ニテマカル。下谷ノ間宮又右エ門永好トイフ人、其外アマタツドヘリ。歌会也。夜ニ入テカヘル。

廿一日。朝ノ間雨。

朝出。今井谷御裏老久芳安積より書状到来。明日罷出候様ニとの事也。明日ハ御裏御殿へ出候筈ナレドモ、今井谷ハ始メテノコトユエ、御裏へ罷出テソノヨシヲ申上シ処ニ、明後日罷出候様ニとの事ニナレリ。

廿二日。曇。

早朝より今井谷へマカル。午飯久芳安積固屋ニテ仕舞、サテ後ニ八重姫君御前へ出テ、百人一首蟬丸マデヲ講ズ。御包ノ物、御菓子、河漏等ヲ頂戴、黄昏ニカヘル。北沢より絹裏付袴仕立出云々。

廿三日。晴。

晚出。御二度御三度相勤。宵詰也。今日御裏講訳。

廿四日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕午後番丁なる小林歌城ぬしを尋ぬ。物語りの内、尾張之寺山吾鬘ガ悴訪ヒ来ル。

廿五日。晴。

朝出。明詰如例。

廿六日。晴。

無事。非番。

廿七日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕晚出。今日

殿様砂村御出。一間半ほどの車船

を造り、池ニ泛べて御覧ニ入たりと也。これハ浦鞆負殿の家来工夫にて、人兩人を載せて車を廻ハさする也とぞ。黄昏前御帰館。御三度勤之。今夜明詰也。

廿八日。晴。

非番。銀坐一丁目山東京山を訪フ。

（虫入）

といふ隣家之骨董店ニ

袖炉アリ。金一兩二歩にて買得。至て下直也。それより一蕙亭ニユキテ、夜ニ入テカヘル。マコトヤ、今日之中飯ハ原孝庵ガ許ニテシタリ。

廿九日。晴。

朝出。朝御飯勤之。五ツ半時、御供揃ニテ青松寺へ御仏詣。今夜明詰。

今五兩 御小納戸よりかり。

内一兩 昨日ノ袖炉代ニカヘス。

〇十月（嘉永六年）一日。晴。

非番。外出。宇喜多一蕙ヲ訪フ。

二日。雨。

晚出。雨。御二度御三度勤之。宵詰。

三日。晴。

非番。神田松田町四万ヲ訪フ。

四日。曇。

朝出。朝御膳勤之。今夜明詰。今日昼後御裏講訳。

五日。雨。

非番。無事。但紀州岩崎時十郎方より紀州の漂流人二人をツカハス。兼て異国ばなし聞度段頼置たるによりて也。鞆負殿其事を聞れ、彼方にて聞申ベキ由ニ付、御用所公義人・御小納戸・御医者等ミなく、彼方罷越聞之。両人之者、一船ながら二手ニわかレテ帰タリ。モトハ十三人船にて、一人舟中にて死す。アメリカカ船ニ助けられ、カンサスカニ着、ソレヨリロシヤ・アメリカカニ行、一手ハ伊豆ノ下田へ去年送られ、一手ハ香港ニおくられたるが、広東乍浦等ヲへ、唐船ニテ去年カ

へり来タル也。咄し至而面白シ。御台所ヨリソノ日ノマカナヒアリ。夜ニ入テカヘリヌ。

六日。晴。

晩出。御二度御三度勤之。宵詰也。

七日。晴。

早朝外出。良齋ヲ訪フ。留守也。ソレヨリ浅草西村藐庵ヲ訪フ。留守也。ミウマヤの渡をコエテ高島千春ヲトフ。老人ニテイトオモシロキ人也。カヘサニ横山町宮崎亦兵衛ガ亭ニ立寄り、長物語ノヲリシモ、伊能三造トテ下総ノ人来ル。コノ人ヨリ香取四家集トイフモノヲ贈ラル。亭主ノ説ニ、コタバ祭酒トナラレタル林式部殿ハ至テ猜忌ツヨキ人ニテ、蘭学ヲ禁ジ、古学ヲ何ノカノトイハレタル、ミナコノ人ノ所為ナリト也。コノ比キク、蝦夷ノ奥ニ異船二艘着ノヨシ、松前侯ヨリ御届アリ、松前ヨリ人数差出サル、ト也。

八日。晴。

朝出。御朝御膳勤之。今夜大中方と周布と両方ノ会ヘ行。明詰。

九日。雨。

非番。無事。

十日。晴。

おそ出。御二度御三度勤之。宵詰。

十一日。晴。

非番。早朝良齋ニ行、上木事を談じ、柳原をへて本所亀沢丁伊能三造ヲ訪フ。不逢。ソレヨリ御厩ノ渡をへて黒船丁宇喜多一蕙ガ橋居ヲ訪ヒ、マタ出て同ジ渡シヲヘテ那須氏を尋ね、一日ノ礼を述べ、横網丁ナルヲ訪ヒ、ソレヨリ靈岸島を過、芝ニ至リ、浜松丁岡部春平をトブラヒ、シバラクカタラヒテ帰リヌ。寒風イミジ。

十二日。晴。

朝出。御朝餉勤之。今夜明詰。

十三日。晴。

六ツ時、御供揃ニテ御老中廻リ也。明詰ヨリ朝御膳部、カヘリテ結

髪ス。スグニ出テ番丁ナル塙氏ヲ訪フ。十五日ノ夜来ランコトヲ約ス。カツ三井ノ差物ノ書ヲタノム。令ノ注書、職原抄ノ古本等ノコトヲ約ス。ソレヨリ小田切ニ行テ同伴、仙台侯ノサキノカタニ東竜齋トテ小道具ノ口(字形不明)(傍記)〔マ、名カ〕作家アリ、コレヲ訪フ。

十四日。雨。

当番晩出。塙次郎訪来。

十五日。晴。

非番。今夜村田次郎三郎同伴、塙氏ニ行、魯西亜長崎渡来ノ事どもをくハしく聞く。これハ、御奉行手附馬場五郎右エ門と申者、彼国返翰の宰料として来て塙氏ニ語り聞せたるの復伝也。馬場ハこれまで数度異人相對して其事ニ馴たるもの也とぞ。

十六日。雨。

朝出。午後昨夜聞書之魯西亜事清書す。

十七日。晴。

非番。今日午後紀侯赤坂御屋敷の林泉を拜見ニ罷越。亭樹の名所六十余、別紙ニ詳なり。誠に目を驚かせり。江戸一番といふ評判也。

十八日。晴。

当番晩出。御二度御三度勤候。今夜宵詰。

十九日。晴。

非番。内居。

廿日。晴。

朝出。朝御膳勤候。今夜明詰。

廿一日。雨。

非番。内居。

廿二日。雨。

晩出。今朝井原豊前出立、帰国。

廿三日。雨、午後晴。

午後晴たり。依之外出、原甲庵が亭ニ立寄。永紫として狩野家の画をかく女にあふ。今日山田佐介といふ両国の書林にあふ。

廿四日。晴。

朝出明詰。

廿五日。晴。

上山庄兵衛・瀬能吉次郎同伴、滝野川の紅葉を見、王子ニ詣てかしの宿ヤにて中食、飛鳥山を眺望してかへる。

廿六日。晴。

晚出。宵詰例の如し。

廿七日。晴。

非番也。三井・有福・村田等同伴にて、神明前の平松にゆく。その故ハ、岡田春平が娘千家の茶をするよしなるに仍て、会席を行ハしめんとて也。夜にいりてかへる。

廿八日。晴。

朝出明詰也。

廿九日。晴。

朝とく出て横山町なる宮崎又兵衛を訪ひ、さて宇喜多一蕙を訪ひ、画事をかたらひて、かへさに吉田数〔傍記〕〔カ〕成が横山町の新道にゐるをたづねて、さてむら松丁なる鈴木重胤をたづねてかへりぬ。

〔頭欄〕〔〇〕

晦日。晴。

晚出宵詰。

十一月〔嘉永六年〕一日。晴。

無事。

二日。晴。

朝出明詰。飛脚到来、栗屋四郎右エ門娘死去、また境与三兵衛が小橋筋之亭焼亡。

三日。晴。

外出。山東涼仙方へマカリテカヘル。

四日。晴。

晚出宵詰。無事。

五日。晴。

外出。芸州儒官金子徳之助ヲ訪フ。

六日。晴。

朝出明詰。

七日。晴。

芸州御中屋敷ニテ大田孫平ヲ訪テ、コノ人ニ広島末田・森元ヘノ状ヲ託ス。ソレヨリ村田ヲ訪ヒ、今井谷ニ行テ百人一首ヲ講ズ。日クレテカヘル。

八日。晴。

御寺参リナリ。予晚出宵詰。

九日。雨。

無事。

金六両 御小納戸ニテカル。ソノ内三両内藤ヘカス。三両フチ代トシテ へワタス。

十日。晴。

朝出明詰。

十一日。晴。

無事。

十二日。晴。

晚出宵詰。

十三日。晴。

無事。夕方より岡部〔傍記〕〔田カ〕東平亭へマカル。

十四日。晴。

昨日御奉書到来ニテ御登城被成候処、浦賀御警固、此御方・細川様御両家へ被仰付との御事なり。朝出明詰。

十五日。晴。

今日御登城被成候。

十六日。晴。

晩出宵詰也。今日公義より被仰渡候御書拜見被仰付ニ付、麻上下にて九ツ時鞆負殿亭へ罷出候様との御事也。予(ムネ)ニ依て代聞。今日宵詰之筈之処、風氣ニ付、謙藏へ相頼、保養ニ相かゝり候事。

十七日。晴。

今日風氣ニ付、河村養現之薬をのミ相臥ゑる。昨夜より今日迄薬六貼のミ候。

十八日。晴。

朝出明詰也。風氣少々快方ニ付、強て出勤せり。

十九日。晴。

非番ニ付、横山町宮崎ガリマカリテ、薩士折田某ガ浦賀夏陣ノコトヲ聞書セル書ヲカリテカヘル。カヘサニ日本橋一丁目横丁ノイナヤニ立寄テ名物ノシルコヲ喰フ。

廿日。晴、夜雨。

晩出宵詰。無事。

廿一日。晴。

非番ニ付外出せんとする時に臨て京師の玉田来訪。此節麻布の十番村田小右工門といふ者のもとに止宿ストナリ。堂上方の書二葉を恵む。玉田と諸共ニ立出。彼ハ他へ行ムトスルヲ予トもなひて塙氏へ同伴、相対何角をかたらふに、何となく家内物さわがし。何事に歟と尋ぬるに、今日娘を佗へ片付けるに依て、追付仲人其外来ルなりといふ。さやうに御取込ならバ帰るべしといへバ、まづ咄し給へ、予ハ一向構ハねバ咄し給ひても何事もなしとて至而平氣也。此人よりきく、文化の初年の松前奉行服部伊賀守、今ハ故人にて嫡子の中務といふ、今の本人なり。此人のもとに伊賀守松前在役中の記録百冊ばかりあり。この中に魯細亜との境目の事あり。文化の午未年比なるべし。塙も暗記ゆゑ、今よくハ記えざるよし也。此方ハクナシリ・エトロウヲ境とし、彼方ハカムサツカを境として、両国の界限これより外へハ出すべからず、其間に数々の島あるをバ無人島にしておきてこれをあひだの隔となし、已来隣好をもなすべからず、もし両方より島を開きて隣をなせば、

自然とよしみをも結いてハかなハぬ理ゆゑ、たとへ開かるとも地を開く事をすべからずといふ約束ありて、此方より彼方へ書渡し、彼方より此方へ受書被附ありと也。これ此度魯細亜へ之御返答にハマツと宜しきものにて、此御約定あるうへハ彼方申分あるまじ。これを塙氏見出て公義へ申出たるハ大功也。今日松山ノ三輪田綱麻呂ニ逢フ。塙ニ入込て学問するべし。また大三島の社人(ムネ)にも逢ふ。また塙氏の話に、近所ニ堀田撰津守殿の邸あり。一万五千石なるに、此度の御手当、足輕五十人、大砲四丁、一丁ニ士八人宛にて三十二人、家中至てくハしく僉義して漸くこれだけの人数を得たりとなり。尤なる事也。それより立出てかの玉田を誘ひ、小林歌城主を訪ひて、日くれておてつばたもちにてしることをたべ、玉田にも振廻てかへりぬ。歌城の話に、伊勢物語の人のむすばん事をしぞおもふの歌ハ、智頭抄に妹也とあり。これよろし。今の勢語ハわるし。源氏わかなに妹にきんを教ふることあり。塙檢校伊セの同異の本八十部バカリ見タレドモ、源氏のわかなの文のごときを見当らずといへりとぞ。なほ檢すべし。

廿二日。晴、午後風寒し。

朝出明詰也。

廿三日。晴。

無事。

廿四日。晴。

晩出宵詰。

廿五日。晴。

朝とく出て麻布御屋敷ニマカリテ志道主水ガ着ヲ賀ス。彼方ニテ中飯ヲタウベテ、ソレヨリ向フ竜土ニ蒲生某ガ亭を訪ヒ、スグ二十番ナル林氏ヲ訪フ。留守也。ヤガテ人走ラセテ呼ニ遣ハセリ。ホドナクカヘリ来タリ。医師(ムネ)モ来テ八畳の広坐敷ニ釜ヲカケタリ。床ニ石川文山ノ雪句ノ掛物アリ。玉田主計ガ宿ナルユエ、カノ者取持テ久シクモノカタラヘリ。暮テ後カヘル。風寒シ。

廿六日。晴。

朝出明話。

廿七日。晴。

諸方カケアルキタレドモ、大概留守ニテエアハズ。

廿八日。晴。

晚出宵話。今日御二度ニ鶴の御開きあり。今夜大名小路小笠原家長屋焼失ノコトニテ、御屋形も大サハギ也。

廿九日。朝雨、後晴。

無事。

十二月（嘉永六年）一日。晴。

御目見御湊（傍記）〔カ〕アルニ依テ御通りカケ也。御帳ノ時青蚘

五十疋（割書）〔十五文〕ヲ差出ス。予朝出ニ依テ御登城ノ節御廊下

ニ詰タリ。其後諸方廻礼。

二日。晴。

外出。

三日。晴。

晚出宵話。上御登城、將軍宣下御礼也。

四日。晴。

非番。内居。

五日。晴。

朝出明話。

六日。晴。

今日御能ニ付、早朝より御登城。予外出。京山宅ニテ寛々物語してかへる。

七日。小雨、後晴。

晚出宵話也。

八日。晴。

非番也。麻布十番の林田氏へまかりて源氏を講ず。かなたの内のかたにて也。表の床に自適齋の三幅対、中東坡、左右松の画をかけたなり。

鴨居に雪山の楽の一字をかける額あり。

九日。晴。

朝出明話也。

十日。晴。

外出して横山町宮崎又兵衛がりまかりて、かれをとまひて深川仙蔵がもとにゆく。仙蔵ハ博識家也。

〔挿入紙片〕

〔割書〕〔安政二〕九月廿六日 敬身堂講談出入人数付立

講師 近藤晋一郎

聴衆 足軽以下 三拾三人

百姓町人 三拾六人

右二廉合六拾九人

同十二月六日 敬身堂出入人数

講師 近藤晋一郎

聴衆 足軽以下 二拾二人

百姓町人 二拾二人

右合四拾四人

〔ここまで挿入紙片〕

十一日。晴、夜小雨。

晚出宵話。上少々御風氣のよし也。

十二日。晴。

午時ばかりより出て向ふ竜土の蒲生憲一を訪ひ、それより林田に至る。今日納会也。出席、瀬戸久敬・くすし（くすし）・茶人深川玄斎也。

玄斎の麻布の御屋形のうしろ、御中屋敷の番所のむかふなりとぞ。

十三日。晴。

朝出明話。

十四日。晴、風烈し。

無事。

十五日。晴、風寒し。

夜前七ツ時比より雑司ヶ谷の辺火事、今朝ニ至るも火静まらず。今日御煤払の御儀式、予晩出なれども早朝より上下平服にて出勤、御煤払相済む。御登城後ニ御佳之間へ下部共召連立入候。其後御帰館、御節酒被召出候処へ御奉書到来、明四ツ時御登城被成候命〔傍記〕〔管カ〕之事。

十六日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕非番。四ツ時御登城ヲ七ツ時御帰館、旧格之如く平日鍵三本相用候様ニとの御事にて、則今日御かへりハ片かま鎗御用ひ被成候。それより直ニ御飲びとして御屋形内へ御酒下候。昨夜より御屋形内大サハギにてミなく大酩酊なり。予ハ御道具増御しらせの御使者として、永代橋辺深川本庄のかた小名旗本十軒ほど御使者にゆき、かへさにいなやにてしるこたうべ、下人などにも料理やにて夜食をくハせ、夜四ツ過に帰りぬ。今日のしめ上下也。

十七日。晴。

今日も御屋形内御飲びの酒宴にて大さわぎ也。今日おそ出宵詰也。

十八日。晴。

けふハ御屋形内いとにぎハし。

十九日。晴。

朝出明詰。

廿日。雨。

非番。夕がた久松氏を訪ふ。かへりて夜に入て大雨となる。

廿一日。雨、後晴。

おそ出宵詰。ゆふがたより雨晴る。

廿二日。晴。

〔頭欄〕〔〇〕外出。野々口隆正が寓を訪ひ、久しく物かたらひて、かへさに原甲庵がもとにてしるこたうべて帰りぬ。

廿三日。晴。

五ツ時、御供揃にて御老中まはり、それより麻布へ御出なされ候。けふ晩出宵詰なれども昼のほど出仕せず。芸州邸なる日比源内・柏村

良助の両士より、彼国産のつけ菜一重と唐くねぶをおくれり。

廿四日。曇、夜大雪。

無事。

廿五日。晴。

朝出明詰。今日御道具増御飲びとして御吸物御酒頂戴、御祝ひ被成、金三百疋被下候。また阿部侯へ御出の御かへりがけ、御通り懸御目見。

廿六日。晴。

無事。

廿七日。晴。

おそ出宵詰。今日能登殿・靱負殿へ御酒被下たるに依て、当番并〔傍記〕〔カ〕詰居の者、并ニ非番の者など召出され、御次にて御酒頂戴。

廿八日。雨。

無事。

廿九日。曇。

朝出明詰。

晦日。晴。

外出。諸処をかけあるきたり。さてこれまで御番、余ハ斉藤謙蔵と相番にて二番方なりしに、始め番入之時の様子にて一番方を勤め来たり。依之今日ハ非番なれども夕飯後より謙蔵・予当番となり、謙蔵宵詰、予つゞけて明詰として二番方ニもどりたり。

〔未完〕